

あとがき

もともとマレーシアの独立期の民族意識の形成について研究してきた筆者がインドネシアの災害対応に関する本書を書いたことは、奇妙な巡りあわせとしか言いようがない。

大学院を出てから常勤の職に就くまで、一、二年の有期雇用の職場を転々とする時期が続いた。その職場の一つが、インドネシアの北スマトラ州メダンにある日本の総領事館だった。当時紛争中だったアチェで、二〇〇二年一二月に停戦合意が成立した。和平プロセスを確かなものにするために国際社会が「平和の配当」として開発援助を投入することになり、その案件発掘が主な仕事だった。紛争とはほぼ無縁であるマレーシアのサバ州を研究してきた自分が、現地の言葉はわかるけれど土地勘がほとんどない紛争地のアチェで何ができるだろうかと自分に問いながら着任した。ところが、着任の翌月に束の間の停戦合意が破棄されてアチェに戒厳令が敷かれ、政府軍による独立派勢力の掃討作戦が展開された。外国人のアチェ入域は禁じられ、筆者の担当は北スマトラ州へのアチェ避難民支援の案件発掘になった。それでもアチェの人たちは、紛争下で住民組織を強めるさまざまなアイデアを持って総領事館を訪ねてくれた。しかし、狭い範囲の人々のみ裨益するように見えてはいけないなどの縛りがあり、そしてなによりも紛争が再開したアチェへの開発援助が事実上凍結されたため、アチェ支援の枠組みで実施できた案件がないまま、一年間の任期を終えて二〇〇四年三月に帰国した。

紛争という特殊事情があったとはいえ、特殊事情のある現場では現地事情の理解は現場での実務にほとんど役に立たなかったという思いが残った。自分が研究しているのは何のためなのか、そして、自分が専門とする地域研究とはどのような学問分野なのかを考えるようになった。そのころ、二〇〇四年一二月二六日にスマト

ラ島沖で巨大地震と大津波が発生し、アチエを中心に甚大な被害が出た。その報に接すると、当時の勤務先で同僚だった石井正子さん（現大阪大学准教授）は、直ちに休職してNGOとともにインドネシアに飛び、津波発生の日後には被災地入りして支援活動を行っていた。その行動力に圧倒されるとともに、その地域の専門家を任じる地域研究者は、現地事情をほとんど知らずに現地入りする支援者に対して支援活動に意味のある現地情報をどのように伝えることができるのかという課題を与えられた思いがした。

災害対応の現場で役に立つ現地情報とはどのようなもので、それをどう伝えればよいのかを考えるには、災害対応の専門家が現場で何を見てどのように考え、どのような活動をしているかを知る必要がある。そのため、緊急人道支援の実務者との共同研究や理学・防災研究者の共同研究のプロジェクトに加えていただいた。はじめて接するものごとが多く、カルチャーショックの連続で、まるで共同研究がフィールド調査のようだった。

地域研究者は「暗黙知」などと呼ばれる土地勘を持っており、それが地域研究者の強みでもあるが、そのような土地勘はどのようにして養うことができるのか。そして、土地勘がある人は、現場で何をどのように見て、どのように考えているのか。さらに、災害対応という関心を共有するが互いに専門性が異なる人たちに対してそれをどう説明するのか。筆者の現在の勤務先は地域研究と情報学の統合に取り組んでおり、情報学の専門家との共同研究を通じて情報の整理や伝達のさまざまな考え方や工夫を知ったことは、このような問いへのアプローチの幅を広げてくれた。本書は、このように異分野・異業種の方々との共同研究の経験を踏まえて、筆者がインドネシアの災害対応の現場で見聞きしたり考えたりしたことを、なるべくその過程を見せながら示そうと試みたものである。

本書は、以下の各研究プロジェクトにおける研究がもとになっている。

トヨタ財団研究助成「インドネシア・アチェ州の災害対応過程における情報の整理と発信に関する調査研究」
(研究代表者：国立民族学博物館・山本博之、2005-2007)。

文部科学省「世界を対象としたニーズ対応型地域研究推進事業」「人道支援に対する地域研究からの国際協力と
評価：被災社会との共生を実現する復興・開発をめざして」(研究代表者：大阪大学・中村安秀、2009-
2010)。

JST-JICA地球規模課題対応国際科学技術協力事業「インドネシアにおける地震火山の総合防災策」(研
究代表者：東京大学・佐竹健治、2009-2011)。

科学研究費補助金(基盤A)「災害対応の地域研究の創出——「防災スマトラ・モデル」の構築とその実践的活
用」(研究代表者：京都大学・山本博之、2011-2014(予定))。

科学研究費補助金(基盤B)「自然災害からの創造的な復興の支援を目指す統合的な民族誌的研究」(研究代表者：
京都大学・清水展、2011-2014(予定))。

京都大学地域研究統合情報センター地域情報学プロジェクト(研究代表者：柳澤雅之、2010-)。
京都大学地域研究統合情報センター「災害対応の地域研究」プロジェクト(研究代表者：山本博之、2011-)。

二〇〇四年一二月に地震・津波の報に接してスマトラHPにより情報発信を行ったことは本文で書いた通り
である。それまで災害と無縁の研究をしていた筆者は、当初は一時的に情報提供を行うだけのつもりだった
が、結果としてその活動を二年間続け、さらにその後も災害対応研究を続けることになった。その後押しと
なったのは、最初にトヨタ財団からいただいた研究助成だった。東日本大震災後の今日では想像しにくいかも
しれないが、当時は外国の災害対応研究の意味は十分に認知されておらず、どの方向に研究が進み、どのよう
な成果が出るかが見えない状況で助成していただいたことは、研究費の面で支えとなっただけでなく、研究活
動の意義(の潜在性)が認められたという点でとても心強い思いがした。

本書は、筆者がこれまでに発表した次の文章を再構成し、書き下ろしの文章を加えたものである。

「災害対応の地域研究——被災地調査から防災スマトラ・モデルへ」『地域研究』第11巻第2号、2011、pp. 49-61. (はじめに)

「災害対応と情報——二〇〇四年スマトラ沖地震・津波の報道記事をもとに」『シーダー』第3号、2010、pp. 24-31. (第1章)

「ポスト・インド洋津波の時代の災害地域情報——災害地域情報プラットフォームの構築に向けて」『アジア遊学』第113号、2008、pp. 103-109. (第2章)

「災害対応を通じたコミュニティ再編の可能性——二〇〇六年ジャワ島中部地震におけるコミュニティ・ペーパー発行の事例から」『日本災害復興学会二〇〇九長岡大会論文集』、2009、pp. 67-70 (西芳実との共著)。(第3章)

「災害の複合性を念頭においた災害対応——二〇〇九年西ジャワ地震に見られる避難と議論の混乱の事例から」『日本災害復興学会二〇一〇一東京大会講演論文集』、2010、pp. 44-47 (西芳実との共著)。(第4章)

「数える」から「ともに語る」へ——地域研究による人道支援の創造的評価に向けて」『人道支援に対する地域研究からの国際協力と評価』大阪大学大学院人間科学研究科、2011、pp. 38-48. (第5章、第7章)

「流動性の高い社会における復興——二〇〇九年西スマトラ地震における日本の人道支援の事例から考える」『日本災害復興学会二〇一〇神戸大会論文集』、2010、pp. 93-96 (西芳実との共著)。(第6章)

「社会を修復する地域研究——物語・意味を再生する「地域の知」上野稔弘・西芳実・山本博之編」『情報災害』からの復興——地域の専門家は震災にどう対応するか』地域研究コンソーシアム、2011、pp. 28-32. (第6章)

「震災はいかにして国民的災害になったか」山本博之監修『雑誌に見る東日本大震災』京都大学地域研究統合情報センター、2012、pp. 3-5. (第6章)

「災害対応の地域研究——ポスト・インド洋津波の時代の東南アジア研究の可能性」『東南アジア 歴史と文化』第41号、2012、pp. 105-124. (補論)

ただし、本書をまとめるにあたって、オリジナルのデータを追加したほか、一般の読者に読みやすくすることを念頭に置いて内容を大幅に書き直したものもある。また、本書には、共同調査の結果として発表した共著論文を再構成したものも含まれている。現地調査やその内容の考察においては、共著論文の共著者を含む多くの方々の考えを参考にさせていただいたが、本書の内容は全て筆者個人の責任において執筆したものである。本書が成るにあたっては数多くの出会いと導きがあった。その一部をごく簡単に紹介することでお礼に代えさせていただきたい。スマートフォンでの情報発信を二年間にわたって一緒に行ってくれたアチェ研究の西芳実さんとマレーシア研究の篠崎香織さん。当時の勤務先である国立民族学博物館で災害対応の共同研究に導いてくださった林勲男先生。災害対応の地域研究の大先輩で、常に研究上の的確な助言を与えてくださった清水展先生。人道支援と地域研究の連携に関する研究プロジェクトを通じて、支援の現場に立って考えることの大切さを教えてくださった中村安秀先生。インドネシアの地震・火山に関する理学・防災研究の研究プロジェクトに門外漢である筆者らを加え、思うように研究させてくださった佐竹健治先生と加藤照之先生。現在の勤務先で災害対応の地域研究を積極的に進めてくださった林行夫先生をはじめとする同僚や共同研究者や事務スタッフのみなさん。いつも大胆な発想で共同研究を大きく展開してくれるシアクアラ大学のムハンマド・ディルハムシャーさん。アチェ津波アーカイブの共同開発で豊富なアイデアを次々と実現してくださった渡邊英徳さん。現地調査でいつもお世話になっているアチェや北スマトラの方々。そして、本書が「災害対応の地域研究」シリーズの一冊として刊行されるにあたっては、企画から編集の段階まで京都大学学術出版会の鈴木哲也さんと福島祐子さんにたいへんお世話になった。

最後になるが、筆者が馴染みと愛着のあるマレーシアを離れてインドネシアに長期滞在してアチエ避難民支援の調査に取り組みきっかけを与え、二〇〇四年の津波後には日々の情報整理に追われて数か月にわたって避難所のような生活になった我が家を支えてくれ、その後もインドネシアの友人・知人のネットワークによって調査を支えてくれ、筆者の考察に対してマレーシアとインドネシアでの勤務経験をもとにいつも鋭い指摘をしてくれる妻の多恵に深く感謝したい。

二〇一四年二月

山本博之